

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

みんな同じ

秦野市立北中学校

一年 古谷陸翔

僕は、自分の病気をとおして、日々の生活の中での環境の不整備や障害のある人への偏見が多くあると感じています。

僕は、生まれつき皮膚の難病があります。皮膚が人より脆く、すぐに傷ができてしまい、毎日、痛みと痒みを我慢しなくてはなりません。身体がとても疲れやすく、思うように動くこともできません。感染症などにより入院し、治療を受けることもあります。また、傷を早く治すために、栄養をたくさんとらなくてはいけません。毎日の栄養は、限られた食事と特別な栄養剤で補っています。栄養剤は、あまり美味しいものではありませんが、身体に必要な

な栄養の為、頑張つて飲んでいきます。成長するにつれて、歩くことが難しくなってきました。移動の時は車椅子を使っています。

たくさん我慢しなくてはいけなくて、辛くなることがあります。そんな生活の中でも自分なりの楽しみもあります。それは、家族と日帰り旅行をしたり、ショッピングモールへ買い物に行くことです。車に乗って、色々な景色をはじめて行く場所などを見ると、ワクワクした気持ちになります。しかし、外出先で車椅子が通れない場所や段差が高い場所があつて諦めなくてはならないことがあります。エレベーターが満員で乗れずに、何度も見送つて待ちぼうけになることもよくあります。昔に比べたらバリアフリー化が進んで、整備されている所もありますが、車椅子に乗っている人にとってはまだまだ不便に感じます。

一番辛いと思うことは、人の視線です。僕と出会った人やすれ違った人の多くが、僕の姿を見て真顔になつたり動きを止めます。ジロジロと見られて変なものを見るような冷たい視線は辛いです。視線の他にも、「何あの皮膚、ママ見てあれ」など、心ない言葉に傷つくこともありました。かわいそうと言われた時には、僕はかわいそうなのか？と疑問に思ったこともあります。そういった出来事は、今でも僕の心の中に残っています。ある時には、病氣のことは分からなくても優しく声をかけてくれる人もいます。見た目が少し違うだけで、なぜこんなにも人からジロジロ見られたり、言われたりしなければならぬのだらうと感じます。海外の場所によっては、障害のある人もない人も同じように生活していると聞いたことがあります。そこに比べると、日本はまだまだバリアフリー化ができていないところや見た目な

どの偏見が多くあるのだと感じました。

僕が病気をとおして感じたことは、一人ひとりが、相手を思いやる気持ちや相手の立場になって考えることで、健常者と障害者ではなく、みんなが同じ「人」として偏見がなく、共に助け合う事ができるような社会になるのではないかと思います。

この先、また悲しい気持ちになることがあるかもしれません。それでもやってみたいことがたくさんあるので、塞ぎこまず、どんどん外へ出ていきたいと思えます。そして、辛いことを忘れるくらい楽しい思い出を作っていきたいと思えます。

